

山西実践【第6学年 体育科】

～ バッチ～ンボール(ネット型) ～



本実践の主張点

自分にとって意味のある知を創造する見方・考え方を育むために
視点1 「自分にとって意味のある知」を方向目標とし、その目標
に向けた授業を構想する。

視点2 教師の評価の観点と子どものものさしを揃える状況をつくる。

自分にとって意味のある知(方向目標)に向けた授業構想

【方向目標としての「意味のある知」の位置付け】

本校では昨年度まで「見方・考え方」を育むための支援と評価に重点を置き、その具体について研究が深められてきた。本年度はさらに、教科の内容理解の先にある、「自分にとって意味のある知」の解釈や位置付けについての議論が進んできている。これまでの共通理解事項は以下の通りである。

【定義】教科学習を通して学んだ見方・考え方を活用して、世の中の事象に対してその子なりに意味を生成し、新たに生み出される知である。

【条件】①4つの観点で育まれる力が十分に備わった状態でこそ到達できる。

②教科学習の学びを世の中の事象において意味付けることで創造される。

③一人一人の認知的な個性が認められる。

④教科の本質(「どうしてその教科を学ぶのか」という問いに対する答え)と密接につながっている。

⑤「正解が1つでない」、「または正解がまだ発見されていない」問題を単元の課題に設定することで創造される。

以上のことを踏まえ山西実践では、「自分にとって意味のある知」(以下本稿のみ：意味のある知)の位置付けについて提案された。意味のある知は子どもの感じ方やそれまでの認知の度合いによってそれぞれ個別に生み出されるものであるため、その具体を個別に設定できるものではない。ただし、教師は子どもが生み出すであろう意味のある知を、ある程度想定しておく必要がある。これは、子どもの到達点を想定しているからこそ、そこにつながる4観点の内容や授業づくりのしかけが明確になるという考え方からである。山西先生からは、意味のある知を学習目標の先にある方向目標として位置付けた上で、これまで通り、意味のある知を直接評価するのではなく、方向目標に向かう授業づくりを行うということが提案された。

【意味のある知(方向目標)を3つの資質・能力から逆向きに想定し、授業を構想する】

今回、山西提案において例として想定されていた意味のある知は以下の通りである。

A児：正確な攻め方ができるためには、分析することが大切なんだな。バレーアナリストって大切な役割だし、素早く分析できるのはすごいな。
(学び続ける力との関連)

B児：母がソフトバレーボールをやっているから、一緒に行って見つけたことを試してみたいな。
(関わる力との関連)

C児：みんなが楽しめるためにルールを工夫することは大切だな。休み時間の遊びの中でも、参加するに合わせてルールを変えてみよう。
(創造する力との関連)

【授業の様子から】

本時では、分析と試合を繰り返しながら、相手のブロックを交わすための作戦をチームで考えていくという問題解決が行われた。課題に向かって主体的に取り組む姿や、友達の声に耳を傾けながら何度も繰り返し作戦を立て、実行することで学びを意味付ける姿があらわに見られるなど、4観点がそれぞれ育まれていることが実感できた。しかしながら、子どもの意識はあくまで本時のプレーをよりよくしたいという願いであり、学習後の振り返りにおいても、教師が想定した意味のある知を生み出している姿はあまり見られなかった。これについて討議の中では、資質・能力という方向目標に向かわせたい教師の思いと、プレーをよりよくしたいという子どもの思いとの間にギャップがあったのではないかという意見が出された。このことから、意味のある知については教師が具体例を想定しておくだけにとどまらず、ある程度、子ども自身の目標として意識できる方向に向かわせるほうがよいのではないかと考える。ここでは、最初から学習内容と方向目標の両方を平行してねらっていくのではなく、子どもの学びの段階に合わせて、意味のある知を生み出すことのよさを子どもに伝えたり、育まれてきた知を称賛したりしていくことで、少しずつ両者の乖離をなくしていくことが大切ではないだろうか。今回の提案という学習内容と自分にとって意味のある知との関係は、創造活動における内容(縦割りではプロジェクト)と自己や集団にとって意味のある価値との関係とも似ている。今後は教科学習と創造活動の両方のカリキュラムから、目的に至る方法の要件に迫っていく必要がある。

成果と課題

○子どもの生き生きとした姿から、支持的風土の重要性が改めて確認できた。今後も意識しておきたい。

○意味のある知の具体を教師が想定し、そこから逆向きに授業を構想していくことは、目指したい子どもの姿、教科の本質に向かうために、また、授業づくりのしかけを具体化させるために有効であることが確認できた。

△他の教科、領域についても、知や価値の位置付けや迫り方について、引き続き考えていく必要がある。

6年 体育科

単元名「バッチ～ンボール」(ネット型)

指導者 山西 達也 先生

互いに声をかけ励まし合いながら、生き生きと問題解決に取り組む子どもたちの姿に、支持的風土の醸成が授業づくりの根底にあるということを改めて感じさせられました。常に新しい教材を生み出し続ける、山西先生のチャレンジ精神に脱帽です。

【子どもの活動】

1 学習課題を確認し、解決の見通しをもつ。

2 ゲーム1を行う。

3 チームごとに振り返りを行い、課題解決に向けて練習する。

4 ゲーム2を行う。

5 これまでの成果を交流し、それをもとにゲーム3を行う。

6 本時の振り返りをし、次時の見通しをもつ。



前回の動画をもとに、チームの課題を確認する



動きを録画しながら、ゲームで作戦を試す



新たな課題と対応策について話し合う



共感・協同的に問題解決に取り組んでいく



成功につながった要因について交流する。



友達と交流し、自己の学びにつなぐ

【山西先生コメント】

今回の実践では、「自分にとって意味のある知」(以下意味ある知)を教師が想定することにより、授業がどのように変わるのかを明らかにしたかった。

授業づくりに影響を及ぼすために、意味のある知を方向目標として位置付けた。そうすることで、意味ある知に向かう授業づくりのしかけや4観点で想定する子どもの姿がこれまでとは変わってくると考えた。また、意味ある知を想定するには、教科の本質や知の構造などを吟味しなければならず、自分の教科観の問い直しにもつながった。6年生の実践ということで、6年間の学びの姿として、授業における子どもの姿を見て取る機会となった。そして、感じたことはこれまでの自分の実践が、提案内容とつなげようとするあまり、発達段階に当たったものになっていなかったのではないかと思います。もう一度、本校が大切にしている子どもを学びの中心に据えた授業づくりを目指していきたい。